

埼玉育ちのグローバル人

世界の果てに住んでみた

第3回 「ケニア：難民キャンプに住んでみた」

平成29年度「埼玉発世界行き」奨学生

駒橋 冴季さん



埼玉県マスコット「コバトン」

みなさん、こんにちは。今回はイギリスでの「何人」という概念に対するカルチャーショックについてお話ししました。今回は最終回ということで、イギリスでの留学を終えた後に赴任したケニアの難民キャンプで感じた、若者たちの可能性についてお話ししたいと思います。

みなさんのイメージする「世界の果て」により近いのが私の赴任したケニアのカクマ難民キャンプではないかと思っています。「カクマに住んでいる」と言うと、ケニアの首都に住むケニア人にすら驚かれます。そのくらいケニアの中でも僻地にあり、難民キャンプ以外は本当に何もありません。ひたすら荒野と青い空が広がり、家畜のヤギやラクダやロバを飼いならす遊牧民族が歩いているのを毎日見ることができます。



カクマのラクダ

難民支援に取り組んではいるものの、難民キャンプに赴任するまで「難民」と呼ばれる人々と接したことはほとんどありませんでした。それでもこの仕事を選んだのは、若者を対象にした支援事業に関わりたいと思っていたからです。サモアで青年期の生徒を相手に教員をしたことで彼らの直面する多くの課題に関心を持ち、大学院では学校に通えない若者を対象に研究を行いました。今後も途上国の若者支援を行いたいと考えてのキャリア選択でした。

実際にキャンプで出会った若者たちは、私の想像以上に明るくたくましく聡明な子たちでした。例えば、難民キャンプに存在する様々な問題について学校の生徒たちが保護者やコミュニティリーダーたちと話し合う場を設けた際には、立派なスピーチを繰り広げる若者たちが何人もいました。また将来の夢を聞くと、弁護士や医者など具体的な職業を挙げて、人々の役に立ちたい、コミュニティに存在する不公平を改善したいなど、明確な理由を挙げる若者がたくさんいました。



意見を主張する難民の若者

サモアでも、大学院で調査を行ったウガンダでも感じたことですが、途上国において若者たちというのは本当に可能性に満ち溢れており、国の宝だなどと思います。いかに彼らを教育するかが、その国の今後10年も50年も100年も左右することになります。もしかしたら皆さんの中には、途上国の人々というのは貧しく教育も受けられず日々苦しみながら支援を待っているようなイメージを持たれている方もいるかもしれませんが、ですが、私がこれまでに実際に会ってきた人々は、貧困や機会に恵まれずに苦しんでいる側面はあれど、ただただ助けを求めているのではなく、限られた選択肢の中でも最大限努力をして、自分の人生を変えたい、豊かにしたい、という強い思いを持っていることが多いです。そんな彼らの強い意志やエネルギーにはいつも圧倒されてきました。



難民の若者たちと

今回はこの場を借りて、皆さんが普段なかなか知る機会の少ない途上国や難民の若者たちについて

お話しさせていただきました。難民と聞くと遠い世界の話に思われるかもしれませんが、(悲しいことに)2019年末時点で世界の難民は7950万人となっており、世界のおよそ100人に1人が難民という状況になっています。知らないでは済まされないほど大きな問題になってきており、皆さんが難民の方々と接する機会を持つのも時間の問題かもしれません。そんな現状だからこそ、彼らに対して少しでもポジティブなイメージを持っていただけたら私としては嬉しいです。

最後まで読んでいただきありがとうございます。これまで3回に渡って私のこれまでの海外生活やそこで得た気づきについて共有させていただきました。これらが少しでも皆さんのお役に立てたらと願うばかりです。